

2.3 羽田空港跡地の河川整備（高潮対策）

多摩川左岸河口部にある羽田空港は、世界第4位の利用者数（年間乗降客数約8,500万人）を誇る国際線ターミナルです。

羽田空港は、利用者増加に伴い、これまで再拡張を沖合に展開してきた結果により発生した敷地を大田区の住宅側に残し、その跡地利用について平成22年「羽田空港跡地まちづくり推進計画」を策定し関係機関で検討してきました。

また、平成23年には「総合特別区域法」に基づき、羽田空港跡地第1ゾーンを含む区域が国際戦略総合特別区域「アジアヘッドクォーター特区」に指定、平成26年には「国家戦略特別区域法」に基づき、大田区をはじめとした区域が「東京圏国家戦略特別区域」に指定され、平成27年には大田区がまちづくりのコンセプトを「世界と地域をつなぐ新産業創造・発信拠点」の形成とする整備方針を策定し、第1ゾーンは、より多摩川の洪水・高潮に対して治水上安全な河川整備の必要性が求められました。



図-4 羽田空港周辺の航空写真

これまで、第1ゾーンは、河川法に基づき策定された多摩川水系河川整備計画（平成13年策定）の高潮堤防整備区間外だったため、平成29年に海老取川から下流側延長400mを新たに整備対象区間として延伸する計画変更を行いました。

また、東京都が管理する海老取川においても、海老取川右岸の河川整備を実施するにあたって、東京都が河川整備計画を変更しました。

2.4 HANEDAゲートウェイ憩いの堤防整備

今回、第1ゾーンに整備する高潮堤防は、従来の多摩川高潮計画に則り、計画堤防高A.P.+6.5mを確保し、伊勢湾台風級の高潮に対しても安全で

ある前提条件に加え、周辺のまちづくりや景観等との一体性を図る必要があります。そこで、背後地の天空橋駅周辺では公園整備も予定されていることから、大田区からの要望も踏まえて、従来のコンクリートのパラペット構造の高潮堤防ではなく、多摩川に訪れる人々への親水性も考慮した緩傾斜堤防として整備することとし、現在、工事を実施しているところです（図-5）。

更に、「HANEDAゲートウェイ憩いの堤防整備事業」とネーミング付けし、周辺住民からも親しみがもてる事業としています。



図-5 高潮堤防完成イメージ

3. 羽田空港跡地のまちづくり整備

3.1 羽田空港跡地第1ゾーン

第1ゾーンのまちづくりについては、京浜急行電鉄空港線と東京モノレールがアクセスしている天空橋駅周辺エリアの開発として、平成27年に東京都、大田区、独立行政法人都市再生機構、国土交通省とが、土地区画整理事業の施行に関する基本協定を締結し、平成29年に大田区が用地取得し、平成30年に企業9社による羽田みらい開発株式会社と大田区で事業契約を締結して、現在、基盤整備や施設の建設を実施しています。

天空橋駅周辺では、都市計画公園の整備や新産業創造・発信拠点として、健康医療、先端モビリティ、ロボティクスといった最先端技術を研究する企業のオフィスが入る予定であり、文化産業では、日本の伝統、観光、食文化、芸術等に関する発信拠点も予定されています。

来年開催される東京2020大会に併せて、一部先行施設をまち開きする予定であり、令和4年（2022年）にグランドオープンする予定です（図-6）。



図-6 羽田第1ゾーンの整備イメージ

3.2 羽田空港跡地第2ゾーン

第2ゾーンについては、羽田空港が隣接し、乗降客が直接アクセス可能な立地条件から、空港の24時間国際拠点空港化に伴って需要が求められる宿泊機能、国際交流機能や都市観光に資する機能の整備として、現在、ホテル建設等が進められており、2020年4月の竣工を目指しています。



図-7 羽田第2ゾーンの整備イメージ

3.3 羽田空港跡地かわまちづくり計画

第1ゾーンには、親水性のある高潮堤防整備と周辺の散策路、スロープ整備、第2ゾーンには、ホテルやテラス、散策路整備が予定され、多摩川の水辺空間とまち空間が融合された良好な空間形成を目指しているため、国土交通省では、大田区と連携して「かわまちづくり」支援制度を活用した計画を推進しています。

また、新たに舟運による交通・観光、水辺のカフェ、水辺のふれあい体験が想定されることから、大田区がかわまちづくり計画を申請し、平成29年3月に登録され、現在、実現に向けた検討を実施しているところです。



図-8 羽田空港跡地かわまちづくり計画

4. 殿町国際戦略拠点（キングスカイフロント）

左岸側の羽田地区から多摩川を挟み、右岸側の神奈川県川崎市殿町三丁目地区については、平成16年いすゞ自動車川崎工場が生産業務を移転したことから、当事務所では、平成19年度から多摩川の計画規模を上回る洪水に対しても堤防が決壊することを防ぐ高規格堤防整備をまちづくりと併せて実施してきました（図-9）。

整備により、高規格堤防の盛土として完了した上面については、平成23年から、国際戦略総合特区（京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区）に指定され、その後「殿町国際戦略拠点キングスカイフロント」と命名、現在、京浜臨海部に集積する産業基盤等の地域資源を最大限に活用するため、グローバル企業（2019年度現在67機関）が先導して、医療産業等の分野で研究等が展開されています。また、隣接して大型ホテルも開業されています。

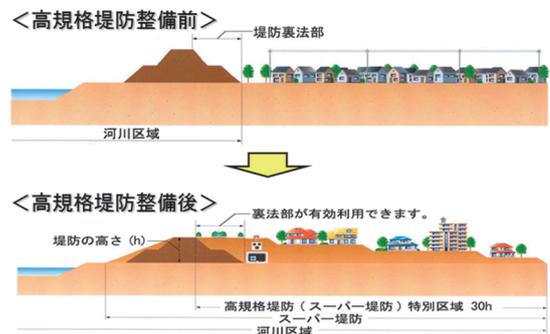


図-9 高規格堤防整備事業



図-10 殿町地区高規格堤防

5. 羽田連絡道路による今後の発展

羽田連絡道路は、多摩川に架かる道路橋です。

羽田空港跡地周辺（東京都側：左岸）と京浜臨海部に接する殿町キングスカイフロント（神奈川県側：右岸）双方の国際戦略拠点をつなぎ、交流促進や連携強化によるイノベーションの創出や産業活性化の架け橋として期待されています。平成26年に位置付けられた特定都市再生緊急整備地区事業として、現在、川崎市が主体で工事を実施しています。

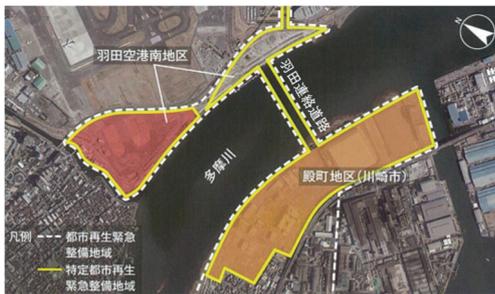


図-11 特定都市再生緊急整備地区

羽田連絡道路は、川崎市内国道409号線と羽田空港跡地地区を結ぶ延長840mの3径間連続鋼床版箱桁橋（複合ラーメン）で2020年度の完成を目指して現在、鋭意施行しています。



図-12 羽田連絡道路の完成イメージ

多摩川河口域は、東京都側（左岸）に世界の玄関口である羽田空港、神奈川県側（右岸）に京浜工業地帯、横浜港が隣接しており、社会・経済活動の拠点が集約されている。東京2020大会を来年に控え、国際的にも益々注目が集まる地域であり、羽田空港跡地周辺のまちづくりや羽田連絡道路の整備により、新たな人や物の流れが更ににぎわい、多摩川を往来し一つになって大きく発展していくことが予想されます。

したがって、河川管理者としても、多摩川の魅力を世界に向けどう発信していくかが重要となっていきます。



図-13 多摩川河口域の発展

6. まとめ

羽田空港へのアクセスや国際戦略拠点の更なる推進に寄与していくためには、今後の気候変動を踏まえた洪水から、河川整備等によって生命・財産を守るということがとても重要です。

また、新たな開発に伴い、河川の利用や産業の増進による環境の変化に対しても、多摩川本来の自然豊かで貴重な空間を維持・保全していくこともとても重要です。

今後も、多摩川が求められている治水と環境の調和したかわづくりを目指して、益々のにぎわいを創出していきます。

参考文献

- 1) 羽田空港跡地第1ゾーン整備事業パンフレット（大田区）
- 2) 羽田連絡道路（川崎市HP）

齊藤勝紀



国土交通省関東地方整備局
京浜河川事務所 調査課長
SAITOU Katsunori